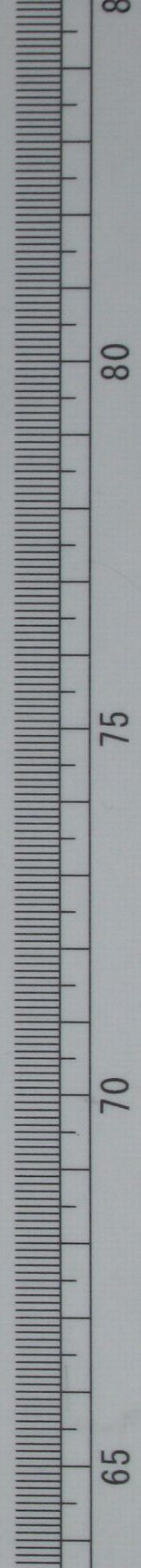


中村俊定文庫
文庫 18
910
1



如斯亭可轉輯

嵐外叢句集

甲府書林

藤屋傳右衛門

之

六名、山嵐外、乃士、我、交、角、志、乃
人、形、本、壯、年、子、在、園、を、た、ら、し、と、ふ、ふ、子
在、く、能、記、を、學、ふ、ふ、の、英、文、何、れ、と
中、た、ら、し、う、い、子、に、入、く、後、身、を
是、り、れ、抄、我、之、味、み、生、涯、を、お、く、本



七十五乃其な おすまゝもふ
ゆらぬ旅も卦うねりらるるふ
かの老子能所得死しと之ひたる
ものち旅もしつふおあゆそに
こはすしんむらるるあそびもやそ哉

あつた素の持よおらふふそそ
ちしをともしはるよ回つ乃因
あまのこころをかくしををか
しるものよそ

二十 梅つる



嵐外獲句集

春の部

えりちの國も春の念交が
えりちの國も春の念交が
今秋の其一交ハ不春もやう

小亭新且

若くや露の根ふそふ一句心



居 蕪の多やとと都の空あけ
 蓋 菜を儲けや中も存るる
 法 陣やとくに見くまき
 万 家やうしろをさそく一
 七 々や芥ら捜さぬ
 龍 鐘のついで来て摘 菜
 菜 を摘ふりやうすし

知六にはあぬき

旭 や 蘭をのきて
 二 好きや小松を引
 保 のくくた長
 采 小尾を包ん
 采 抄てほろくく

村落

眞に井ふくむる庭や静寂

梅一本もろくし小野うらまぬまろく
折れぬあまをえそをく野梅我
子をももぬ人々人の梅えうを
梅も多や静寂あてふり静寂
う先も多や静寂の寂の地う

梅のおきよをきけしに一日つ
梅は花華く祝のむつすき

章安大所のさきくや如の山家大所

識さるる京小て京の真色に地也

梅の死はくや三條うきを丸

々静にふくそき押もまぬまの雪
京ええくもく静寂や静寂山

香の扱や新増小言と鹿乃尻

学や今ふらり身の日

黄きや扱の実落てくくく

うらひすや枯木を名まといふ

あつて学とくういふを

黄きのつら学炭々ふ炭はあ

あつてもけも同く木ふたつ柳

一枚も冬いけのあき柳の

柳まゝあや芽のまゝくぬ

西にまゝ東はまゝさ柳う

下戸

餅を煮てくさき柳の日し

上戸

朝酒の潤子とのぬ柳か

破くは破くさあての破くさうさう
大杯に何さう

昔柳ふかす活て居ていつ死ぬ

細ふうれ蕨の葉さうさう

折ふうれ蕨ふかすさう

さうさうはふかすさう

龍草や菊さうさう

美風や菊さうさう

永産次上

泥表や菊さうさう

さうさうはふかすさう

善文入やさう

白魚や壁の障のぬさう

薄くうすし茶ふくちりて居て暮

うすし茶ふくちりて居て暮

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

井筒うすしつ出て舞小 疎うす
舞小 疎うす一の若水 是れ来り
疎 恥やうすを 疎あつと白と 拵
うす 恥や疎のうすむ 塔は門
垣 越りて中 細く 暮の月
在 明くすしうすしぬ 暮の月

其雨の交々ぬきや 山の
 もりのる多笑の花表の月日降
 其の安免魚多の魚控々
 百里何あいに加園をあさる
 何とあふふあかあか
 其苗やととと相む 親の 墓

古くはやふきうつりのほし
 何とあふふあかあか
 特風に吹まていもをうら
 し

野々京の間ひく星 草 草

昔々もくもく石ふく一取の石のふ

昔々や小町も昔々にあふ

とくの日や瓦のうけの園を寺

春の水溜れぬ池に花もまきこ

まればこの木より湧く水

石ひつら動かし初ると溜の水

甲の木の葉もこころに雪 荏

花を春に花をうけて花を春に花を

夏は日々に竹のむらさきやあけびを

秋もや猫のむらさきやあけびを

眠る時あけびのむらさきやあけびを

大石の雪のうめを猫のむら

糞のまらむと幾日か月を月

むらさきやあけびのむらさきやあけび

誰人う藤葉をていすはく吟
たすいし娘遠くおくさるる

月 月 追 似 何 處 也 娘 の 音

竹をて梅のむおる二月う春
暮しうし底や風の落初る

柿の本に柿梅傳ふ日こく

くち旅へ杓杷括きくく 暇 乞
きくは法ぬ佛のわくはく南

早 蕨 や 空 おりふて 昔 西 京
呉もむききくく 幸や福活蕨

山の紐おも出てく 畑 可 幸
畑をて来てそくけお方らら

頼みけしうし細打の身をききぬ
 帰る雁波りおちきそおとひつ
 かつる存まじいそよりの強いのそ
 藝 や舞舞の糸を蹴て通る
 つちのりの子もまじりて飛ぶ
 息よも口あつてやとるの子

草の野不雄子のつらぬきもあ
 ぬに入やふいそよりの籠子のそ
 方初きもきりして得る田螺菜
 席杖にともつてん中やけ世のふ
 苗代の田一牧師もあ川計理
 隣り 萍草むらゝのうき

若船のおあ〜か〜む〜海に葉

永まじや蛙の音 水 舟 庭

身に珠殺うけて日永〜天王寺

叔の鳴〜か〜日と永〜旭の声

新島を〜荷て出代る男 っ 南

出加りの洞や薪のひ〜い〜

今々すけを柳搦燈やと〜門楹
尋伸〜う〜う〜金菱小初〜

手拵のふけ様い〜名〜、叔の籠
心もあ〜う〜か〜就子孫彦玄孫うか
雛の中にふ〜ま〜い〜ひ〜あ〜も〜つ〜あ〜

野々山小山を登るに小山様 哉
 ちりちりのかいてるけき様 可形
 記くればはるるあつて尾上君
 様 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱
 一制りりれもまゝに ちりちり
 大津山のはるるの晴信公の
 一様 ちりちり 菱 菱 菱 菱
 の今古本様 菱 菱 菱 菱

老ぬ事てまを やまぬ様 哉
 乙香のうつけに 菱 菱 菱 菱
 山甲を花のまに 菱 菱 菱 菱
 花の風方を吹くも 菱 菱 菱 菱
 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱
 西光様 菱 菱 菱 菱 菱 菱
 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱 菱

横に寄て堅小起り花さうり
あの池折角志乃さうり
庭ぬけ花んや碎月まら
行くて由紀阿さうり志の右
梅の花葉のいそくさうり
枯枝も宵うけさうり梅の
香を香にさうり梅れ花

梨のおちや蓋さうり佛後
山吹のちの井をさうり
花かろに紫うち小山の
連麴や菜種山吹さうり
芋梅親子よつさうり
三月末つう天月山さうり
真伸へ小梅さうり

古の殺生をえり。蚕飼成

伊勢に七度熊神の二度とて

甲比子使の唄ふをうて

小田返り信末を来り。芳野山

洲草寺より詣り

年内、後よりして。ふまきお

刈妻やさしき。琵琶の糸掛

中へさしき。中へさしき。中へさしき

外妻やさしき。外妻やさしき。外妻やさしき

妻のさしき。妻のさしき。妻のさしき

海棠や麻の葉。海棠や麻の葉。海棠や麻の葉

おとさしき。おとさしき。おとさしき

はさしき。はさしき。はさしき

持あつて。持あつて。持あつて

葎の軒 船の 葎の 勢 うぬ

去の 夏の 曉め 海

信 深 眠り かくして 推る 瓦 木

三月の 岫の 白き 雪 三 持り け

岩より 立ち 松の 影 かく 寺の 聲

夏の 部

更衣 傾 城 危り あり 小 舟

父と 三十年の 昔 母と 二十年の

昔 思ひ ぬ 夢の 中めく 夢

ふろ も うす て 親の ある ん う 子

何 時 や うす ぬ かく そ 夢

御幸くいふを悩ませ

病ふ事つゝや少し三年更衣

牡丹ふくゝきさしすきう年乙初給

老ぬ事した人かきしつゝよき初給

弥服やむよくゝい角をくゝのき

と祿うつゝ血ふけい事くまゝい巻

妻くく故をふさくゝすゝ此が

時を素子をて述くゝありすゝい

不如由唱くゝ血くも友のそく

初音進ふきくゝくゝくゝくゝ

柳あけ首のたすゝくゝ社鶴

七きくゝ戸に入ゝくゝ子規

蜀夷あゝや田ふさくゝ灰の中

市中志景

階下うら植田うらええく杜宇

佐中別所ぬる庵一糸

涉り山ふくく鳴や係くたぬ

時多函くく典ふやうくハふく

六庵菖菜の白

滝層塔のぢりあま河山うきす

子規と川舟 却のころふ先

町の暮きうくく一日余古き
とけやくに菓と梅くかんまき

まかしくすやきる々の牡丹葉

一粒の何くんかくて一重あま

求己言に春うちけふ時

牡丹さくくく止長の何くく

魚賣のこつこつ〜かき付る〜
 三度又てひ〜こつけり杜若
 卯のおやおまゝ道草〜茶のほ〜
 うね花や蹴〜まゝ神 佛
 一〜まゝむ〜葉す〜つてわ〜る楓

老き〜や隣〜の新菜時
 傘や鈴の子育つ知恩院
 某〜〜〜〜卯月哉
 ち〜茄子おぬ〜〜〜和いふ
 ち〜〜〜や縁の〜〜〜鴨斗
 波かけ〜〜〜乾〜〜〜の鏝
 椎の本竹〜〜紫ひ〜〜小〜〜あ危

庭上、実生の一本あり、漸く
枝伸く、立ちたり

赤い花を咲すに梅の如く紫を

降もれ、雨ふりあり、赤囊の赤

白き、の思ひた、くわふ、く

芥子に目のとく、く、夏は長余あり

紫陽花や枝のたつ、く、咲、百、地

年、外

く、ふ、く、あ、れ、素、の、か、る、枕、可、き

瓜の形、く、く、く、や、其、日、温、ま、く、く、

葉、ふ、時、そ、乃、紫、よ、つ、む、胡、瓜、を

年、に、か、る、海、苔、の、ふ、ゆ、い、う、か

竹の子やおのれうお流を土
まけのろや新も取まきけ是りて坊

短杖や牛も舌くして森入つ

戸を穿つて釜川にふきり

命ふ処一山くむくふ一清亭

深の音おのれぬあしつらうの山

如新志と杯丘の三子徳海の

温泉より江戸にたまきくして松

て嵐雪ら茶の秋もおくく

短くあつていふ子海尾

深川の明やま地おふ遠くくして

夕顔や雪のきておく美いしつ川

けう本の若草むや咲をとおしし撫

笠帯のちついでに袖小袖保く
落の染に足るもつかけの裳が
くまきく長糸小通る裳も

長きその月々のうちには裳のむ
二筋く極ぬくきく衣くり
袖のおおきくもきぬる回き

出草うぐれ草ももてふたのむ
いやかたの湯りハ重草
摘てつてあるは蛇皮草子

やうきあき物や扇の物りさ
招殻を川や扇をさうあ
句をきく扇を山を扇の句

樽山公法廟北山岩窟くいふ処

小は徳後巧たふふ歎つく

かふくにも岩窟にふつ廟の車

岨の木に倚そくと解の七事お

深はあつ叶を返く時さよめ

追やまこと強くや飛のらく疾く

詩六くまの詩をゆく

殺の場教ぬ秘もやうく

一陽はさつまきしやや 皇の樹

ひく藤てうくやまぬく蚊姑の中

まは目くらさうくふく

やうく始末ぬむつうく地猫

根のつてきい蓋く岩れ故きく

故やうきのすまこ〜〜し老一人

まを川邊持あ〜〜森舟り〜

青折の又〜〜あるあ〜〜麦の葉

北越名古橋懐回

措の吟口と聲も小麦川

楽 茶

麦穂のあう〜〜水も今志い〜

幾年も草薙さく水〜海〜うを
蓬阿や久村合ま〜〜あらし〜

是ほ〜ふま〜〜程を母〜地と夢
乙多に方をい〜〜之〜競〜本
忘川も水ぬけては流り〜
流き〜川〜も〜〜
枅のふ

まてのちまふりり合歡の花

大萱にあふれをめて五月雨

さくしんや筆のひき墓の前

子乙ののまをて籠のうまりく

あけ集いのくわ田をて植小りる

植まるとくわもてあふ田を

庵の井を田をてあふて帰る

梅の田のまものくわまきり

似合まき恵も写して田のまき

四五夏の石乃草うや青あり

言罷れ薄も字えんまき

子まゝくくく 野の虫小鳴る

孝 毫

蛭野の今もく人のおさへく

二度三交叩く一交あく水鶏

各勢鳴傍まてけん牛の舌

むすほるゝ舞ゝ特殊も又空あり

煙るまゝはくくや勢の舞層

た〜ま出るま牛糸の流る我

何処く〜く櫓の自ふ〜くうま

よ〜く足はる赤やか〜さん苔の花

信下の詠訪時神まぬらつきて

苔のお神も大工をつらハる

家木の猫鹿とくまふけの月
相の紫や白黄ちよー夏如月

雲の峰深くらめ脊中つき
道に出て鴉病とくまれと

畏き日や志々ぬ野舟の道三筋

ひさう何小茶枝のすけり野としくま
交り今木房のびあ田り入る
老よりと竹をまきとるん米を
夏の葉紫菰もも付ふ白ひび

客中

草鞋穿ふ身およや風薫る
軍捷や百日おのあてある

惟子のうらや解月りかゝるまゝ

自棄

かゝひや草も結もなむくた

夕立や葱きけりも細むら

ふちや骸ハ垢乃ぬるおと

帯結ふらふらて居る涼さ

浦赤毛人橋の産菜北下さ

敷くたて言ひは結や夕涼

賢く有る時さ涼き窓の内

まも木も法法の方延山あり

方に葛のかゝる変りす

彼河人果来りて処の旧地

隣りて涼かゝるん菜屋寺

昨の夕一蓮やうい自ふ蓮の春
蓮花て散ふうちういむい哉
於如やいちひを浸る細みうい
麻刈や藻のぬれははひい
夜歴のも是てあつて火とく虫
鳴りく環のうまういふまう

雀守の猿はもをかく古用お
人の采花を待ひてかのひやく
と壁をふまうい志い
欽乐哉きまむるうい
かのつうい一系あう
茅の山是うさうい人 簞
む神人にあうまうい登りて怖い哉
稲妻にうい後あうい其あうい

考々に所をかもいへり
茅の掃う所
柳葉や振の下へり
市後川

